

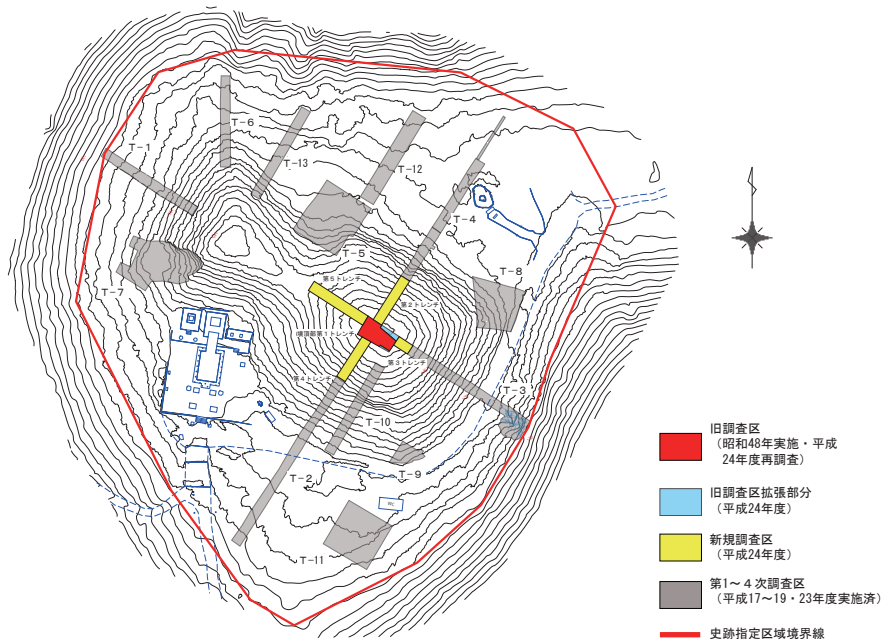
史跡東之宮古墳発掘調査 現地説明会資料



2012年
9月29日・30日
犬山市教育委員会
調査支援：国際文化財株式会社



東之宮古墳の位置と周辺の遺跡



トレンチ配置図 (1/1500)



(上) 蓋石の検出 (北西から)

(下) 蓋石と残存する被覆粘土 (南東から)



(上) 蓋石裏面の加工 (南東から)

(下) 被覆粘土と上面の角礫 (真上から)





石槨西半と粘土棺床（南東から）

蓋石撤去後（北から）



（上）石槨北側の集積（南西から）

（下）2段目テラスと葺石（北東から）



史跡東之宮古墳の調査

はじめに

愛知県犬山市大字犬山字北白山平に所在する東之宮古墳は、東南から北西に中心軸が通る全長およそ 70m の前方後方墳であり、国史跡に指定されています。古墳時代前期中葉（紀元 3 世紀後葉から末）に築かれた東海地方を代表する古墳です。

昭和 48 年に盗掘を契機として最初の発掘調査が行われました。その際に、埋葬施設が竪穴式石槨であることがわかり、内部からは鏡 11 面をはじめ、石製の腕輪や合子、鉄製の武器や生産具が出土しました。

平成 17 年から 19 年にかけては、遺跡の範囲確認調査を行い、墳丘の規模や形態に関する情報が得られています。

今年度は、前回の調査の際に空洞のまま埋め戻された石槨の現況を確認した上で、適切な保存処置を行うことを目的として再調査を実施しています。

調査の成果

竪穴式石槨の内部は、赤色顔料を塗布した石材に囲まれた細長い長方形の空間となっています。大きさは長軸 4.8m、短軸約 1 m、高さ 1.2m です。基底には、角礫を敷詰め、粘土製の棺台を置き、その上に木棺が安置されていました。木棺は、腐って残っていませんでしたが、棺台の形から底がゆるい湾曲をもつ形状であることが推測されます。

東之宮古墳の石槨の特徴として、東小口の壁体に、幅 1 m 以上、高さ 50 cm の一枚石を用いている点があげられます。性格は不明ですが、同時期の他の石槨ではみられない特異な例です。

埋葬終了後に、7 枚の蓋石を用いて、石槨は閉じられていました。いずれの蓋石も長側面と石槨内面を平滑に加工していました。最大のものは、長さ 2.4m、幅 1.4m、厚さ 15 cm あり、重量はおよそ 1 t と推定されます。

蓋石の大きさを大、中、小に区分すると、両端と中央が大、中央の両隣が中、両端の内側が小となり、意図的に配置しているようです。

石槨の構築には、2 種類の砂岩が使用されています。石槨壁体の砂岩は、美濃帯で産出する可能性が高い、硬質のものです。蓋石と東小口の一枚石には、

壁体の砂岩に比べて軟質の砂岩が選択されていますが、産地は現在のところ不明です。さらに、蓋石は青白い粘土によって覆われていました。現状でも粘土は厚いところで 20 cm 近くが残っています。蓋石周囲の被覆粘土上面には、角礫が敷詰められており、排水的な機能を果たしていたと考えられます。その後は、赤や黄、褐色の土を互層にして石槨上部を丁寧に埋めています。

墳丘の調査では、2 ヶ所でテラス状の平坦面と 2 段目斜面の葺石を確認しました。これまでの調査で確認されていた葺石の基底石は、長軸を横にして置かれているものがほとんどでしたが、今回検出された 2 段目葺石の基底石は、長軸を縦に置き、墳丘盛土に立掛けるような状態で設置されています。葺石の施工の仕方が場所によって異なっていた可能性が指摘できます。

まとめ

東之宮古墳を再調査したことで、埋葬施設、副葬品、墳丘といった古墳を構成する要素の多くが明らかとなってきました。特に長大な竪穴式石槨の構造についての情報が得られつつあることは、東海地方の古墳時代を考える上で重要な成果となります。

今後は、この古墳を未来に伝え、みなさまに身近なものとして活用していただけるよう、史跡整備を進めていく予定です。

末筆になりましたが、発掘調査、現地説明会の実施についてご協力を賜りました成田山名古屋別院大聖寺様に感謝申し上げます。

史跡東之宮古墳発掘調査 現地説明会資料

2012 年 9 月 29・30 日

犬山市教育委員会

歴史まちづくり課

〒484-8501

愛知県犬山市大字犬山字東畑 36

Tel. 0568-44-0354

調査進行中のため、本資料記載の内容は変更の可能性がありますので、ご了承ください。

